

---

# 魔法係長桜井秀子

高柳 総一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法係長桜井秀子

### 【Nコード】

N7352Y

### 【作者名】

高柳 総一郎

### 【あらすじ】

何もつかめなかった女の、最後に残った小さな希望の残り滓。この物語は、桜井秀子という女が希望の残り滓から見つけた、大きな使命の物語。

(pixivでも同様の作品を投稿しています)

## 第一話『始動』

1

「係長、おはようございます」

自分より少々年上の部下が軽くお辞儀するのを見て、桜井秀子の一日は始まると言っている。『六道商事企画課係長・桜井秀子』のチームプレートを立て、パソコンのスイッチを入れる。社内メールリストの受信箱は珍しく空だった。係長は他の平社員をまとめるという重要な役職だ、と個人的に秀子は思っている。当然、リーダーである自分にメールが来ていないという事は、それだけトラブルが起これなかったという事の印だ。それは秀子にとって喜ばしい事であったし、同時に少しつまらない事でもあった。

基本、商品企画という仕事はそれをひねり出すのが大変なだけで、それを売るのは販促部や営業部の仕事だ。しかも、六道商事は文房具の一流メーカーとして日本に君臨する会社であり、特に油性マジックの国内シェアは四十パーセントを誇っている。もちろん、秀子もこの間まで新型ボールペンの企画・開発に携わっていたが、そんな事は非常に稀だ。大ベストセラーがある会社と言うのは、それが電化製品や食品を扱っているので無いなら尚更。その商品に頼り切ってしまうというのが普通だ。今回のボールペンでも、あまりよい顔をしてくれない上司を口説き落として着手したものだ。

まあ、私に絶対の自信があったわけじゃないけれど。キャリアウーマンというのは、ある程度の地位が無いといけないと秀子は考えている。何故なら、女性が職場に居続けることを快く思わない男性の上司が未だに居るのも事実であり、そういう上司は大抵いい人ぶって『早く結婚したらどうだ』と良いところのボンボン

を紹介したがったりする。それを断るには、会社が手放したくても手放せないほどの根を張る。つまり地位を手に入れなければならない。

だが、私は凡人だ。

パソコンから目を離し、メガネを取って目をこする。秀子は今年で三十四歳になった。だが、相変わらず同じ生活が続いている。上司に頭を下げ、部下を怒鳴り、会議をして、パソコンの前に座り、疲れたと思う暇も無く会社の人間と飲みに行く。たまにバツティングセンターに行つて、あたりもしないのに部下や同僚の手前喜んで見たりする。大学をぎりぎりを出て、親のコネで何とか就職した会社で、毎日毎日同じ日々を過ごしている。

この前など、田舎の年老いた母がまたお見合いの話を持ってきた。この格差社会が進む日本で、自分より年収が上で、なおかつ自分を愛してくれるような男がどこに居るといふのだらう。人生は短い。もう三十四歳だと言ふのに、結婚しても、待っているのは老いだ。自分が愛した男に、そんな苦勞はして貰いたくない。苦しむのは自分だけで良い。秀子はそう思っていた。

「係長、お茶とコーヒー、どちらにします？」

秀子は、コーヒーしか飲まない。十二年も勤めてここで同じ時を過ごしている秀子にとつての『現実』を知らない部下を見る。二十代くらいの、まだまだ自分は大学生です、と言いたそうな顔がそこにあった。三十四歳ですでに、眉間にナイフで切りつけたようなしわがある自分とは、随分と違っていた。しわひとつ無い美しい顔。可愛らしいえくぼ。仕事一筋で生きてきた秀子には、もはや何一つ残つて無いものだった。

「係長、あのう……」

「コーヒーで良いわ」

羨ましかった。羨ましいあまり、彼女を見つめすぎたかもしれない。もしかしたら、嫌われてしまっただろうか。そんな事を考えている内に、デスクにはいつの間にかコーヒーが置いてあった。ご丁寧に、

白濁としたミルクが黒いコーヒーを侵食していた。

秀子はミルクが飲めなかった。

『 調べによると、男は意味不明な供述を繰り返しており 』

TVのニュースでは、相変わらず同様な出来事が延々と流れている。秀子は、そんなニュースを聞き流しながら、喫茶店で昼食のフレンチトーストを食べていた。同じように昼食をとるような同僚は居ない。二年前に、同期入社の子が結婚し、それきりだ。次の年の年賀状には、幸せそうなおその子と、夫が笑顔で写っていた。さつさと地球は滅亡しないのかしら。

秀子は元々温厚なほうだが、最近年のせいか少々愚痴っぽくなってきていた。そんな自分が、秀子はたまらなく嫌だった。核戦争による地球滅亡のシナリオを考え始めたころ、店の扉が軋むように開いた。会社に程近いこの小さな喫茶店は、最早レトロをとこの昔に通り過ぎていくようなボロい店だ。秀子はここあまり甘くないフレンチトーストが気に入っているためにここに来ているが、今の若い新入社員には物足りない店だし、レトロを愛する大人さえも寄り付きそうに無いボロさ加減で、ここの常連である秀子でさえ、何故つぶれないのかはなはだ疑問なくらい変な店なのだ。そんなこの喫茶店に客が来るというのは、一大事とも取れる出来事なのである。…肝心の老主人は、と言うと、あまり興味が無さそうにしてなかったりするのだが。

入ってきたのは、でっぷりと太った男だった。まだ5月だというのに、いまにもはちきれんばかりのYシャツは汗染みが出来ており、手には少し水滴がしたたっているほど濡れているハンカチを持っていた。どこかのサラリーマンかと思っていると、いつの間にか秀子の前の席に座っている。空気が生暖かくなったような気がする。男の吐息の一つ一つがとにかく不快に感じられる。……そう感じないほうがおかしい。

「すみません、桜井秀子さんですよね？」

男が息を切らしながら話しかけてくる。別に走ってきたようにも思えない。あまり関わりたくないが、目の前で話しかけられて無視する、と言うのも感じが悪い。しかも、よりによって自分の名前をフルネームで言っている。もしかしたら、取引先の人かもしれない。「そ、そうですか……」

しかし、誰であつたのか思い出せない。秀子は焦った。会社員と言うのは、マナーが最も問われる職業だ。もしこの男が何処かのお偉いさんだったりすれば、秀子に重大なダメージを与えてしまう可能性もある。一体誰なのだろう。

「本当ですか！？ いやあ、良かった良かった。実は私、こういう者です」

男ははちきれそうなYシャツのポケットから、少しシワの入った名刺を取り出し、秀子に手渡した。それには『日本魔法少女協会スカウト部門チーフ・酒木原秀明』と印刷されていた。……秀子は、自分は少し疲れているのでは無いか、仕事の途中で居眠りして、夢を見ているのではないか、と思つてしまつた。自分の頬をつねってみたが、痛かつた。……現実だとすれば、『日本魔法少女協会』とは一体何なのだろう。少し前に流行つた、メイドキツサなるものと同じようなものなのだろうか。秀子の頭の中で、まるでシャボン玉のように憶測が浮かんでは消えていったが、確信を得られるような答えは得られなかつた。まず、メイドキツサなる所にスカウトされているのであれば、この酒木原と言う男は少々見当違いをしている。まず、秀子はそのままで美人ではない。しかも、眉間にナイフで傷つけたようなシワがある女に、

「いらつしゃいませご主人様」

などと言われて喜ぶ男が存在するのであろうか。たとえいたとしても、秀子はそんなところで働きたくは無い。

「どうやら貴女は勘違いしていらつしゃるようですね」

出されたおしぼりで色々なところを拭きつつ、酒木原は言った。

「スカウトと言っても、あくまでお話を聞いていただくことを前提としています。お嫌でしたら、断ってください結構です」

酒木原は出された水を一気に飲み干した。相当のどが乾いていたのだろう。さらに老主人におかわりを促した。

「スカウト……って言われても……。一体、何のスカウトなんですか？」

秀子は、氷が溶け切ってしまったコーヒーを飲んだ。水とコーヒーは、混ざるとやはり水が勝ってしまうようだ。それはすでに水に侵食されていた。

「魔法少女です。……プリントミスですかね？ 書いてありませんか？」

「書いてありますよ」

「では、私が言いたい事も分かりますよね」

「分かりません」

即答だった。秀子は絶対そんな事分りたくなかった。

「んー……分かりました分かりました。じゃあ、説明しましょう」

秀子は、もうここを立ち去ってしまったかった。だが、お昼休みはまだ一時間近く残っている。どうやって理由をつければ良いのか、秀子には検討もつかなかった。

「要するに、桜井さんに魔法少女になっていたいただきたいんですよ」

「意味が分かりません。新手の風俗なら断ります」

「いえいえ、そんないかがわしい職業ではありません。……それにお言葉ですが、私が風俗を開くならもっとほかの人を使いますよ」  
秀子が男をにらみつけると、さすがに言い過ぎたと思ったのか、とてもバツの悪そうな表情を作った。最も、手元ではいつの間にか運ばれてきたコーヒーに角砂糖を三個ほど突っ込んでいた。大して悪いとも思っていないのだろう。

「桜井さんは、小さいころアニメはご覧になっていましたか？ ほら、コンパクトを開いて呪文を唱えたり、ステッキを振って箒を乗り回すアレです」

「はあ、まあ人並みには」

「でしょう？……あ、すみません。私にも彼女と同じものをもらえますか？」

70はゆうに超えているであろう老主人がよろよるとフレンチトーストを持つてくるのと同時に、再び酒木原が口を開いた。

「まあ、魔法少女と一口に言っても、種類がたくさんありましてね。トラブル解決タイプ、純戦闘型徒手空拳タイプ、純戦闘型砲撃タイプ、医療従事タイプ・科学応用タイプ……数え切れないほんです。それだけ、魔法少女の需要が高いという事でしよう」

「はあ。私は実際にそんな『魔法少女』なんて見た事無いですけど」「それなんです！」

突然大声をあげた酒木原に、秀子は驚きのあまり危うくひっくり返ってしまふところだった。

「大声をあげてしまつて申し訳ありません。ですが、桜井さんの言うとおりなんです」

「はあ」

酒木原は、どうやらこの店のフレンチトーストが痛く気に入ってしまったらしい。老主人に今度はフレンチトーストを三枚頼むと、再び秀子の方に向き直った。

「女性であるあなたに話すのは少しためらいがあるのですが……。九十年代以降、女性の性の乱れはどんどん加速しています。ご存知ですね？」

秀子は最早あきれて物も言えず、とりあえずうなずいておいた。

「それに伴つて、早くからそういう行為に及ぶ人が増え、我々が求める魔法少女の条件に合う女性はどんどん減りつつあるのです。魔法少女になるための第一条件は処女ですからね」

「帰っていいですか」

「お願いしますからもう少しだけ話を聞いてください。二十年前、全国に五千人居たはずの魔法少女は、いまではもう百人近くまで減つてしまつているのです」



「それで、私を魔法少女にしたいと。そういう事ですか？」

酒木原はしきりにうなずいた。秀子がようやく理解できたのが嬉しかったのか、首がちぎれんばかりにうなずいていた。

「お断りします」

酒木原の両眼が大きく見開かれた。……大方、まさか断られるとは思っていなかったのだろう。

「確かに、どう調べたのか分かりませんが、私はこの年までずっと処女です。……別に興味が無かったわけでも無いですし、機会が無かったわけでもありません。でも、そんなわけの分からない職業に就いて、今の生活を捨てるような真似はしたくありません」

言えた。秀子は心中自分を褒めたい気分だった。ここまで自分の言いたい事をはっきり言えたのも久しぶりのような気がした。だが、酒木原は笑っていた。あれだけはっきり断られたというのに。

「ほう、そうですか。いやいや、確かに貴女が言う事はほとんど本心のようなですね」

「どういことですか」

「貴女、一度で良いからドラマの主人公になりたいと思ったことはありませんか？」

「はあ」

「ドラマの主人公は、それが喜劇でも悲劇でも、変化と刺激に満ちた生活を送っています。まあ、主人公にとってはいい迷惑かもしれませんがね。しかし、貴女は今の変化の無さ過ぎる生活に、飽き飽きしているのではないんですか？」

「それとこれとは……」

「別だと言いたいんですか？」

確かに、凶星だ。言い返す言葉も無い。

「大丈夫ですよ、桜井さん。今の会社を辞める必要なんかありません。それに、基本的には一年契約で更新性です。いやでしたら一年だけ頑張つてやめていただいて結構ですし、活動するのは夜だけです」

「どうして夜だけしか活動しないんですか？」

酒木原は鞆から書類を出しながら、こっちに目線を合わせずに答えた。

「魔物は夜にしか活動しないからです。大丈夫ですよ、桜井さんには十分な戦闘能力があるはずですから。……桜井さん、はんこか何かお持ちですか？ 出来れば、銀行の届け出印がいいのですが」

「ちょ、ちよつと待ってください」

何も秀子は、そんな得体の知れない魔物などと戦うとは言っていない。確かに酒木原が言うとおり、日々の生活にはうんざりしている。毎日毎日同じようなループが続き、将来どうなるのか分からない。十二年間勤めてきた会社でも、いまだ係長だし、仕事を舐めている後輩や部下からは負け犬呼ばわりされているのを知らないわけではない。

「大体、私がそんな事をやって、なんのメリットがあるんですか？」

「もちろんあります。あなたが今勤めている会社で一生働いても得られないくらいの報酬をお支払いします。桜井さんは、結婚する気がありませんか？」

「そ、それは……」

「隠さなくても、事前調査で確認済みです。老後は今のご時勢、おひとりじゃ大変ですよ？ 厚生年金も出るでしょうが、結果的に貧乏で寂しい生活が待っているのは目に見えています。協会に一時でも所属すれば、老後の生活も委託業者の超高級老人ホームで暮らせます」

いくらなんでも胡散臭い……が、秀子は不思議とそちらの怪しさを疑うのでは無く、老後の暮らしの事を考えていた。秀子は、自分がすべて苦しみればいいと思っていた。周りの人間に迷惑をかけるのだけはごめんだからだ。だが、それは逆ではないだろうか。自分が苦しむ分だけ、周りの誰かも苦しむのではないのだろうか。どんなにつっぱっても、いつかは老人ホームやヘルパーに頼るときは来るのだろう。それを自分が苦しんでいると言い張るのは、愚かしい事だ。

実際に苦勞しているのは、ほかでもない老人ホームの職員やヘルパーだし、彼らに頼っている事を『苦しんでいる』などと言うのは愚の骨頂だろう。それに、老人となった自分の周りに、誰が居るというのだ。親は死に、友人は口クにおらず、今まで同僚に冷たく接した自分に、誰が好き好んで一緒に居てくれるのだろうか。そう考えると、秀子の心の中には、不安が洪水のように押し寄せてきた。

今はいい。会社と言う居場所があるから。だが、老後はどうなる？

「あの……桜井さん？」

酒木原は、いつの間にか三つ目のフレンチトーストを食べ終わっていた。

「何でもありません」

とりあえず話を聞いてみよう。確かにわけの分からない話である事は間違いない。だが、秀子はそれ以上に不安に駆られていた。

「一応、その魔物とかの説明をして欲しいんですけど……」

酒木原は驚いて、思わず口に運んでいたフレンチトーストを落としてしまった。

「ああ、そうか！ 説明するのをすっかり忘れていましたよ。まず、魔物ですが、大した事はありません。人間の悪意が生み出す化け物ですが、やつらに大した知能は無いですし、桜井さんの能力の高さがあるなら、朝飯前でしょう」

秀子にはいまいち理解できなかった。この際、この男の話をすべて信じるとしても、秀子自身にそんな能力の高さがあるとは到底思えなかった。大学時代はラクロス部だったが、すでにその時の能力は失われている。何を根拠にそんな事を言うのだろうか。

「実は、人間には潜在的に魔力があるんですよ。その力は年をとる毎に上昇し、大体二十歳前後でピークを迎えます。三十を越えた人間は、理論上際限なく魔力が上昇するのです。しかし、先ほど言った通り、童貞や処女で無くなると魔力は無くなってしまふのです」「つまり、私はちょうど脂ののった旬の魔法少女ってことですか」「言い方は悪いですが、まあそういう事になりますね。……そう言

えば、まだ返答を聞いていませんが……。どうするんですか？ 桜井さん。強制はしません。あなたの判断がすべてです」

秀子の心は意外にも揺れていた。老後を考えると、わけの分からぬ職業でも、ヘッドハンティングの一種だと思えばかなりおいしいだが、この男の話が全て嘘だとしたら。自分がさつき言ったとおり、変な風俗で働かされるかもしれない。

「……分かりました。出来るかどうか分かりませんが、やらせて頂きます」

だが秀子は『今から』逃げたかった。現実から目を逸らしたいが、老後も見据えるという矛盾を孕んだ自分の欲望を満たしたかった。

「……分かりました。次は登録名なんですが……そうそう、流石に桜井さんくらいの女性が魔法『少女』と名乗るのはキツイですね」

「私も嫌です」

「桜井さんは確か……そうそう、係長でしたね。なら『魔法係長』でどうでしょう？」

「まあ、別に『少女』以外なら……」

「そうですね。なら、魔法係長で登録しておきますね」

酒木原が契約書にそう書くのを見ながら、秀子はある種の恍惚感さえ感じていた。それが自分が決断できた事に対するものなのか、今まで安全な道を通って来たのを逸れた事への背徳感なのかは分からなかった。だが、この男が風俗の人間だろうと、人身売買のブローカーでも、魔法少女を集めていてもかまわなかった。秀子にとつては、その矛盾した欲望を満たす事だけが最も大切な事だったのだから。

「……以上で、説明は終わりです。何か質問はございますか？」

「いくつか質問しても良いですか？」

「どうぞ」

「まず、この武器は何なんですか」

秀子の目の前には、明らかに極めた人が持つような銃が置いてあった。今更ながら、秀子はどうしてもない事に首を突っ込んでしまった、と悔やんでいる。

「違いますからね。勘違いしないでください。これは魔銃トカレフです」

「トカレフって言うてるじゃないですか」

「よく見てください。グリップ……って分かります？　そうそう、その握る部分です。そこには普通は銃弾を入れる弾倉があるんですが、無いでしょう？」

確かに、何も入っていない。それに、プラスチックのように軽い。

「弾は自身の魔力を込めますから、媒介さえあればなんら問題ないんです。昔はメルヘンチックで綺麗な色をしていたのですが、最近シックな色がブームですから。どうです？　大人の魅力があふれ出ているでしょう？」

むしろ青い服を着た国家権力の方々が惹きつけられそうな魅力があふれ出ている、と秀子は思ったが、あえて深く聞かない事にした。シックでないデザインの事を考えたら、気分が悪くなってきたからだ。

「もう一つだけ聞いても良いですか？」

「何なりどうぞ」

「まさかとは思いますが……コスチュームとか」

「ありますよ」

秀子が言い終わるか終わらないうちに、ある意味一番肯定して欲しくない事実を肯定されてしまった。

「メイド・ゴスロリ・女子高生・少女風……。リクエストさえあれば、オーダーメイドでお作り……」

「じ、じゃあ目立たないスーツか何かを」

「しますが、桜井さんの場合、一年だけの勤務ですから、一からお作りするのはもったいないですね。協会のレンタル品を使いましょう」

一縷の望みが絶たれてしまった。……いや、待てよ。秀子は思い直した。酒木原はシックなデザインが流行っていると言った。ならば、コスチュームもシックなデザインが流行っていてもなんらおかしくないではないか。

「あおう、サンプル画像とかはあるんですか？」

酒木原はベルトが少しきつくて苦しいのか、少し顔をゆがめながら、腰のポケットから何とか携帯電話を取り出した。そして、秀子に画像を見せてくれた。赤を基調としたドレスのような作りで、動きやすくするためか少しスカートが短めになっている。胸には大きなリボンがあしらわれており、これも派手なオレンジ色をしている。袖口にはフリフリ素材が使われているようで、それを着ているサンプル画像の少女は、まるで携帯の中で踊っているようだった。

「……派手すぎませんか？」

「協会がスタンダードとして基準にしている、現在最高性能の魔法少女服ですよ？」

そんな事は知らない。再び秀子は気分が悪くなった。脳内では、赤いフリフリのドレスを着て、右手に銃を握り、夜空を駆け回りながら化け物と戦う自分が居た。三十分前に自分で決めた事とは言え、あまりに軽率だった、と悔やまずには居られなかった。

「あと、移動手段なんですけど、これになります」

酒木原が再びバッグをあさり、野球ボールほどの赤い水晶玉を七つ取り出し、テーブルに慎重に置いた。

「何ですか？これは……」

「宝玉です。これに魔力を込めると、桜井さんに乗せて飛べるようになります」

胡散臭い事この上ない。大体、魔法使いは箒に乗るものではないのか？秀子がそう訝っていると、酒木原が顔を覗き込んできた。

「ああ、もしかして箒を期待してましたか？」

「期待してたわけじゃあ無いですけど」

「昔は箒だったんですよ？ ですがホラ、上昇するときの衝撃で痔

になる人が続出しまして。おまけに、目立つんですよ。箒つていうのは」

確かに、あんな柄の細いものに乗りたいくは無い。……秀子は、今日始めて酒木原の言う事に納得できたような気がした。

「さて、これで本当に私からの説明は終わりです。後ほど服をお届けしますから、メールの支持どおりに魔物を退治してください」

そう言うのと、酒木原は立ち上がった。秀子が顔を上げると、そこにはもう誰も居なかった。テーブルには、フレンチトーストの皿が三枚とコーヒーの飲み残し、一万円札が置いてあった。

「係長、お帰りなさい。どこまで行ってたんです？」

年上の部下が笑みを浮かべながら話しかけてきた。秀子はそれを笑顔ではぐらかすと、再びデスクに座った。パソコンを立ち上げると、受信メールはやはりゼロだった。会社では、また延々と同じ日々が続くのだろう。不安が無いと言えば嘘になる。だが、秀子の中では矛盾した欲望を満たした事の満足感の方が遥かに大きかった。酒木原から貰った道具を、デスクの引き出しの奥に閉った。

「あの……係長」

デスクの前に、今朝の女の子が立っていた。

「今朝はすいませんでした。私……係長がミルク嫌いなもの知らなかったんです。本当にすいませんでした」

彼女の髪が揺れる。

「いいの」

「え？」

「いいのよ。怒ってないから。それより、コーヒー入れてくれない？」

彼女ははじめ目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻り、またあのえくぼを見せてくれた。運ばれてきたコーヒーには、ミルクが入っていなかった。秀子が口に運ぶと、口の中にほのかな甘みが広がった。ど

うやら、また気を利かせて砂糖を入れてくれたらしい。秀子は、ブ  
ラック派だった。



## 第二話『争い』（前書き）

相入れぬ二人。相反する感情。思想。譲れない思いがそこにあるというのなら、闘争こそすべてを決するにふさわしい。それを無謀、野蛮と卑下し批判することは、たとえ神でも出来はしない。なぜなら、闘争は神が作った悪趣味なゲームなのだから。次回、『争い』。譲れぬ秀子の決意が大地をゆるがす。

## 第二話『争い』

2

「桜井君、どうかしたのかね」

企画課課長の大川が怪訝そうな顔で部下の顔を覗き込んだ。

「何かいいことでもあったのかね？　ずいぶんと嬉しそうだが」

「いえ、別に」

桜井秀子は、にやついていた顔をいつもの無愛想気味の顔に無理やり戻すと、再びパソコンのモニタに向かい始めた。実際、彼女は嬉しいのだ。彼女は、彼女の枷となっていた、サイクルから外れた。その事がたまらなく嬉しいのだ。もう自分は、周りとは違う。確実に頭一つ抜けたところにいる。その優越感がたまらない。モニタに移る彼女の顔は、やはり少しニヤけている。大川もまたこちらを怪訝そうに見ている。秀子は人とは違う。そんな小さな事実が、秀子の顔を落着かないものにさせていたのだ。

「係長、製造コストの見積もりが上がってきたんですが」

部下の報告に気づくのも数秒遅れる。秀子の脳内はまさしくお花畑状態であった。結局この日は普段ならしないようなミスを重ねる始末で、大川からの小言も右から左へ抜けていった。ふらふらとまだ夢見心地のようで、普段なら入るのに躊躇するような牛井屋へ吸い込まれて行った。

「おや？　奇遇ですね」

見慣れた巨体に汗ばんだ顔の男がいると思ったら、案の定酒木原だった。普段の秀子であれば、彼を疎ましく思ったことだろう。夜八時過ぎに、いい年した女が牛井屋でひとりできるところなど、知り

合いには見られたくないものだ。

「酒木原さん。こんばんは」

自分でも少し声が上がっている、と思った。おそらくこれから起こることに、自分自身期待しているのだろう。

「わかりますよ、お気持ち。牛井は老若男女、どうしても食べたくなる時があるものです」

酒木原が冷水がなみなみと入ったピッチャーから、次々と水をコップに入れ飲み干していく。彼がいかに今日も汗をたくさんかいたのかがよくわかる。

「ええ。普段は一人じゃ入れません。……正直、今夜が楽しみです」  
「それは頼もしい限りです。今夜は初陣ですから、気負わずやってください」

店員が怒号に近い声で、酒木原の目の前に牛鮭定食を運んできた。

酒木原は、味噌汁のわかめを食べおわると同時に、凄まじい勢いで牛井をかきこみ始めた。

「先日送ったメールはご覧になりましたよね。遭遇ポイントでの魔物出現予定時刻は二時間後。レベルは三ですから、桜井さんにとつてはむしろ格下、楽勝の部類に入るでしょう。我々サポートスタッフも現場にて待機しますので、ご安心を」

と、言うような事を酒木原は言ったようだった。半分は口の中の牛井に阻まれ、聞こえなかったのだから、これが正確であるなら秀子の聴覚は鋭いほうだろう。

「報酬はどうなるんですか？　そういえば聞いてないんですが」

「契約書、読まれなかったんですか？　我々日本魔法少女協会では、年棒制を採用しています。我々の査定ですと、秀子さんの年棒は五千万となっております」

「五千万ですか！？」

予想外の破格であった。秀子が魔法少女などというふざけた仕事を引き受けたのには三つ訳がある。ひとつ。秀子は、酒木原の『老後の不安』という言葉に恐怖を覚えた事。ふたつ。秀子は、このまま

の退屈で単調な人生に飽いていた事。最後に、経済的にも豊かになると酒木原に言われたからである。

秀子は単なるサラリーマンである。経済的には一人暮らして問題ない。だが、都内のマンションで寂しく過ごす今の生活に、何の魅力があるのだろうか。何もない。今から結婚しても、たかが知れている。せめて老後くらい、豪勢に暮らしたいと思ったのだ。豪勢といっても、少し贅沢が出来ればいいと思っていた矢先にコレである。棚からぼた餅ということわざがよく似合うことだろう。

「ま、なんにしる十分な報酬かと思えます。……なんとも言いますが、くれぐれも気負わずやってくださいね」

いつの間にか、牛鮭定食は空になっていた。本当に酒木原は食べるのが早い。彼の特技ともいえるのでは無いだろうか。

「それでは、遭遇ポイントで会いましょう」

酒木原は千円札を席に置き、去っていった。

薄暗い廃工場がそこに広がっていた。今回の遭遇ポイントは間違いない。ここのはずだが、酒木原のいうサポートスタッフの姿は見当たらない。

「……『変身』」

秀子がぼつりと呟くとほぼ同時に、秀子は完全に『変身』を完了していた。燃えるようなオレンジ色のフリフリドレス。片手には持ってきた黒い銃『魔銃トカレフ』が握り締められている。

「……どこにいるのかしら」

つぶやいた声が拡声器を通したように響いた。同時に、雷鳴が轟くような音がした。今日は雨は降らないと朝の天気予報で言っていた。それに、さっきまで月が見えるほどきれいな夜だった。突然雷が鳴るわけがない。何かと考え込んでいると、今度は非常に癪に障る

ような甲高い笑い声が工場中に響き渡った。

「ここで会ったが百年目！ 情報通りにやってきやがったわね！」  
甲高い。キンキン響く声は秀子の耳を塞ぎたいという欲求を満たすのに十分なものであった。女の声は反響に反響を重ねており、どこにいるのか分らない。

「私の私による私のための騎士！ あの女をやーっしておしまい！」  
再び響く甲高い声を合図にしたのか、地面が揺れ始めた。何かが来る。女のカンと言うべき物が、秀子はその場から突き動かした。案の定、地面が風呂桶の栓を抜いたように渦を巻き始め、その真ん中から何かが姿を現した。泥で出来た人型の何かが、先ほどの雷鳴と聞き間違うような咆哮をあげた。

「なんなのよ、もう！」

トカレフを構え、トリガーを引く。光線が泥人形を穿つ。雷鳴が轟く。だが、泥人形は動きを止めなかった。泥が、まるで間欠泉が噴出すようにせり上がり、泥人形がそれに腕を突っ込む。すると、泥で出来ているのかよく分からないが、棒状の物体が泥人形の腕に握られていた。

「あたしの『ロードナイト』はそんなもんじゃ無駄よ！ カリバーンを持ってしまったロードナイトを止められる魔物はいない！」  
大体、人間が動かす魔物があるなんて事があるのか。いや、酒木原は何度も「言っておかなくてはいけないもの」を忘れる事が多い男だ。『魔法少女が動かす魔物』が居てもおかしくないではないか。そんなことを考えているうちにも、カリバーンの一閃が迫る。泥のもつイメージから、鈍重かと思っていたが、とんでもない。鋭い一撃を確実に叩き込んでくる。もちろん、トカレフを何度も打ち込んではいいる。だが、この魔銃トカレフの特徴として、連射すると威力が落ちるようなのだ。只でさえさっきの太い光線が聞かないのに、泥人形にしてみれば、蚊に刺される程度だろう。そもそも、この泥人形に痛覚が存在するのかさえ怪しい。

「どおーしたのかしらあ？ 言つとくけど、降伏なんて許さないん

だから！」

オレンジのフリフリドレスのおかげで、身体能力も多少は向上している。だが、中身はこの前までごくごく普通の女だったのだ。百戦錬磨の戦士のようにはいかない。しかも、正確無比で叩き込まれるカリバーンのおかげで床は凹んでおり、くぼみのひとつに足をひっかけ、すっ転んでしまった。

「ぐっ……」

「魔物のくせに魔法少女の真似をするなんて、なかなか生意気ね。おっ死になさい！」

カリバーンが無情にも振り下ろされる。情け容赦ない死が迫っていた。思えば、短い人生だった。だが、秀子と思う。自分は何を成したのだろうと。人は一生をかけて、何かを成す。だが、自分は何を成したというのだ。富も、名声も、地位も、友情も、恋も、何一つ成していない。それで生きてきたと言えるのか？

じゃあ、このまま死ぬべきだろうか。カリバーンは、地面にめり込んだ。

お世辞にも美しいとはいえない、多少茶色になりつつある金髪をなびかせつつ、工場の奥から一人の女が姿を現した。ビビットピンクでレースのついたひらひらのドレスを着込み、手にはこれまたピンク色の杖のような物が握られている。

「さすがね、私のロードナイト。貴方は最高よ。ビューチフルよ。それでこそこのミッチー様の奴隷にふさわしいわ！」

ミッチー、と名乗る女は、甲高い笑い声を上げた。

「動くな！」

「動くな、といわれて動く人間なんていないわ」

ミッチーが後ろを振り向くと、恰幅のいい男と、黒い服を着込み、銃を持った数人の男が立っていた。

「あらあ、久しぶりね、酒木原さん。聞いたわ、貴方出世したんですって？」

「そんな事は今関係ないですね。堀田三津子さん」

「私をその名前で呼ばないで！」

ミッチーこと三津子は、酒木原の言葉に態度を豹変させた。

「まさか、もう七人衆が動いたのですか」

三津子は答えない。

「一体何をするつもりなんです、七人衆は。これは明らかに契約違反ですよ。魔法少女同士が争うなど、絶対にしてはならないんです！」

「黙りなさいよ！ 私が戦っているのは『魔法少女のフリをする魔物』よ。別に契約違反などではないわ」

「七人衆たる貴女が、そのようなわがままでは困ります」

「黙りなさい！ 何が七人衆よ！ 私は私よ。七人衆じゃない！」

泥人形が咆哮を上げる。カリバーンを再び振り上げ始めた。

「総員退避！」

酒木原達は万が一のため、常に最低限の武装をしている。だが、今回の魔物は低レベルとの報告を受けていた。魔法少女に対抗できる装備など、携行しているはずも無い。それほど、魔物と魔法少女には埋めがたい差が存在するのである。

「私は堀田じゃない！ 三津子でもない！ これからは『魔法少女ミッチー』としてひとりで生きるの！」

カリバーンが酒木原たちに襲い掛かる。地面が穿たれる。酒木原たちはごくごく普通の一般人であるため、カリバーンの一撃などを食らえばひとたまりも無い。ひき肉になるのがオチだろう。

「この魔法少女ミッチー様が、宇宙で一番自由なの。誰の命令だって聞きはしないわ」

三津子のテンションはそれこそ最高潮に達している。酒木原は内心焦っていた。泥人形自体は、一般に『魔物』のカテゴリに入る。そもそも魔物とは、社会構造上発生する、感情の『カス』の塊だ。パ

ソコンが定期的にデータのクリーニングをしなければならないように、社会というひとつのシステム構造体は、『魔物』というカスを生む。現在の複雑な社会は、それだけ様々なタイプの魔物を出現させているのだ。今回、酒木原が『至極普通の』魔物だと判断したのが間違いだった。魔法少女の中には、自分が直接手を下すタイプのほかにも、いわゆる『召喚師』タイプが存在している。彼女たちはいわば負の感情を人工的に爆発させ、それを構成物質として自分の僕を生み出すのである。堀田は、『召喚師』タイプの魔法少女としてかつて一線級の活躍をしていた女だ。ある事情により衰えてしまった今でも、魔法少女協会最大戦力の七人を示す、『七人衆』の一人に数え上げられている。それがこのように身勝手なことをされたのでは、サポート側としてはたまったものではない。

「チーフ、どうしますか？ 堀田の魔力は桁違いです。しかも今の我々の装備では泥人形を突破して堀田を確保する事は難しいでしょう」

「そうですね。しかし我々がまずすべき事は、桜井さんの救出です。堀田をひきつけて、桜井さんの救出をすることだけを考えましょう」酒木原は冷静だった。ベテランの彼にとっては、予想範囲外の出来事などめったに起こりはしない。だが、今回は状況がまずい。まずすぎる。

（まさか桜井さんが押し負けるとは）

秀子が負けるという可能性を、正直酒木原はほとんど考えていなかった。いや、考えていないというのは流石に言い過ぎだったが、本当にこういう状況に陥るとは考えもしていなかったのだ。いくら魔力が高くて、経験が無ければ意味が無い。酒木原はそう考えた。買いかぶりすぎていたせいで、自分たちの慢心のせいで、秀子は恐らく命の危機に瀕している。それだけは確かな事なのだ。

「チーフ！ 桜井さんはあっちです！ こちらで堀田を引き付けます！」

「三分あれば大丈夫です！ お願いします！」



数人のスタッフが、携行している手榴弾のようなものを泥人形に向かって投げる。一般的な爆発を引き起こすものではなく、一種のブラックホールを発生させるものである。ブラックホールが引き寄せるものは、『魔物が纏う魔力』。魔物が『負の感情が変質したもの』であることはもはや周知の事実であらう。魔物は、その姿を維持するために、魔力をいわば皮膚のように纏い、自身の形が崩れないようにしているのである。魔物とほぼ同じ構造を持つ堀田の僕にも十分効果があるのだ。そうしてブラックホールは、泥人形の纏う魔力を引き寄せ、消滅させ始めた。絶大な効果とまではいかないだろうが、泥人形を引き付けるくらいは可能なはずだ。

「桜井さん！ 起きてください！」

返事はない。秀子が着ているものは、魔法少女協会の誇る最新型のスーツである。たとえダンプに轢かれようと、露出している頭に衝撃が無ければ、骨折すら防ぐ事ができる。とは言え、自分より五倍以上の大きさのある泥人形の一撃を食らったのだから、脳震盪くらいはおこしていても不思議ではない。魔法少女同士の戦いは、お互いの死を招くほど激しいのである。

「起きてください！」

「起きる前に殺つてやるわよ」

堀田の甲高い声が響く。時間切れだ。目の前には、泥人形がカリバーンを構えた状態で聳え立っていた。まさに絶体絶命である。

「完全なるトドメというヤツを刺させてもらうわ」

カリバーンが振り下ろされる。

流石の酒木原も、秀子を抱えて逃げる事は不可能に近い。秀子とはかく、自分が死を逃れる事は出来ない。死は経験できない。それは誰であっても例外ではない。酒木原は自らの死を覚悟することは出来なかったが、迫ってきている死を感じることは出来た。

何時間がたったのだろうか。永遠にも近い時間が過ぎたような気がしたが、酒木原はすぐにそれが間違いであつたと確認する事が出来た。生きている。

「何もやっていない」

桜井秀子が立つていた。先ほど彼女の事を『買い被りすぎた』などと言った酒木原だったが、その発言をすぐに撤回しなければならぬ状況である。何故なら、彼女は魔銃トカレフを掲げ、それでカリバーンを受け止めているのである。いくらブラックホールで魔力を減らし、多少なりとも弱っている泥人形の一撃であつたとしても、その重量まではどうにもならなかったはず。何よりも、彼女は先ほど死の一手手前まで行つたはずなのだ。そんな彼女が、スーツによつて『死ぬ事はない』事を分かつていたとしても、こうまでして堂々と攻撃を受け止め、立つていられるというのだろうか。

「私はまだ何もしていないんです」

「は、はあ……」

「死ぬことは簡単です。諦めれば、多分死ぬんでしょう。でも私はまだ諦めたくない。だって私は、まだ何も成していないから」

堀田は愕然としていた。泥人形は間違いなく質量を持っている。トランクくらいは余裕で押しつぶせる。いくら素晴らしい耐久度や能力を持っていたとしても、質量には勝てない。質量こそ力の全てなのだ。

「あんたはどうして潰れないの？ どうして？」

「話す必要はありません。私にも分りませんし」

「何だかよく分からないけど、貴女はこのミッチー様に喧嘩を売ってるよね……」

「それなら一生そう思っていればいいじゃないですか。知ってます？ 嫉妬をする女は結婚出来ないそうですよ？」

「魔法少女にそんな事言ってもしょうがないと思つたわよ？」

「少女って年でも無いでしょう？」

水を打ったような静寂がその場を支配した。酒木原は長年の感覚で、

この勝負が一瞬の元で決着がつくと直感した。秀子の雰囲気が違う。堀田も今までのふざけた態度を取ってはいない。両者とも、実力のある魔法少女であり、そんな二人が不器用ながら本気を出している。それがどれほどの物かは、酒木原には理解し得ない。ベテランのサポートスタッフとはいえ、魔法少女同士が本気を出して戦うとどのような事が起きるのかなど、理解の外にある。事例がほとんど無かったのだ。

「やっちゃいなさい！ ロードナイトオ！」

咆哮。雷鳴の轟くような咆哮。カリバーンが再び秀子を襲った。トカレフから太い閃光が放たれ、カリバーンを穿つ。砕く。泥人形には、それだけで反撃の手段は無い。カリバーンを復元するにも時間がかかる。秀子の勝ちがほぼ確定した瞬間であった。

「ば、馬鹿な！ このミッチー様のロードナイトが！」

「大したことはないんですね、ロードナイトなんて大層な名前の割には」

宝玉を靴底に仕込み、魔力を足にありつたけ込める。秀子はその反動によって宙に飛び出した。ほとんど無効化された泥人形などもう怖くは無い。堀田を守るものは、もう無い。城壁は崩れたのだ。

「桜井さん！ 堀田を、本体を叩いて下さい！」

「分かりました！」

秀子は腕を引いた。宝玉の推進力と、スーツによる身体能力の向上で、パンチを放とうとしているのだ。堀田も魔法少女の端くれとはいえ、一般的な女性である事は間違いない。一撃入れることが出来れば、それで勝負は決する。

「あんななかに、このミッチー様は負けられないのよオ！」

堀田もまだ諦めてはいない。時間を稼げば、再びカリバーンを復元する時間も稼げる。まだ勝負は互角なのだ。秀子の拳が、堀田のステッキを叩く。

「やるわね」

「貴女こそ」

にやりと笑みが浮かぶ。考える事は二人とも一緒だった。堀田は秀子の拳をステッキで受け流し、秀子はトカレフで拳にあわせ、直撃を避けた。もちろん、二人は今日始めて出会うし、秀子にいたっては人生で初の殴り合いである。というか、人生でここまで本気で、しかも女性同士で殴りあう事などあるのだろうか？　だが、一つだけ確かなことがある。秀子は、高揚感を感じていた。拳を交える事によって、高揚感を感じるなんて、秀子には初めての経験であった。秀子は、堀田と殴り合いながら、自分の性癖はもしかしてサドなのかもしれない、などと冷静に考えていた。

「だけどねえ、勝つのはこのミッチー様なのよ！」

堀田は持っていたステッキを秀子に向けて振り下ろした。トカレフで殴打を受け止めた秀子だったが、それが間違이었다。ステッキは折れ、トカレフは衝撃でトリガーが碎けてしまったのである。

「折れちゃいましたね」

「あんたのもね」

堀田は躊躇無く、拳を突き出した。綺麗な右ストレートが、秀子の鼻に決まる。今度はメガネのフレームが折れた。

「折れたわね」

「ええ。貴女の悪趣味なステッキより大切なメガネのフレームがね」秀子は痛みを我慢しつつ、堀田の腹に拳をぶち込んだ。立ってられない。いつ食べたものかは知らないが、胃の中の物が吐しゃ物として、血と混じりながら堀田の口から流れ出した。いくらスーツが優秀でも、衝撃を完全に無くす事は不可能なのだ。ここまでくれば、秀子も容赦はしない。今度は腹に蹴りを入れる。身体能力が上がっているためか、堀田の体が多少浮いた。

「降参、しますか？」

「黙りなさいよ」

堀田はもう立ってられない。が、彼女の魔法少女としてのプライドが地に伏せる事を許さなかった。強引に大地を踏みしめ立ち上がる。

「やせ我慢にしか見えませんが」

「貴女、耳は大丈夫なの？ ミッチー様が黙ってろって言ったのよ？」

吐しゃ物と血で塗れたビビッドピンクのドレスのポケットに手を突っ込み、何か丸いものを取り出した。宝玉である。秀子の物と色も大きさもほぼ同じ。それを、手に握りこみ、拳を作る。

「私の顔にこれ以上傷なりなんなり作るわけにはいかないのよ」

「奇遇ですね、私も同じなんです。明日は朝一で会議があるんですよ」

秀子も同じように、宝玉を握り込む。今度こそ決着をつける。二人の女が考えている事は一緒であった。目の前にいるいちいちムカつくこの女をハッ倒す。秀子に至っては、当初の『アルバイト目的』から既に大きく脱線してしまっている。今は、目の前にいる堀田を殴り倒す事のみを考えている。人に頭を下げて生きるサラリーマンである普段の秀子なら考えられない事だ。

そもそも世の中には、暴力で解決できる事というのは少ない。あるにはあるが、それは一般人にはどうしようも出来ない、『法』や『権力』などの社会機構に捕らわれているから起こる逃れ得ない事象なのである。だが、目の前のこれは捕らわれない。権力や法や金や上下関係、これらに一切関係ない。獣が子孫を残すための闘争のようなもの。人間もとどのつまりは獣である。獣が前に進むため、生きるため、闘争して何の問題があるのだろうか？ 闘争は社会に捕らわれたりしないのだ

「正直言つて、貴女なかなかやるわね。このミッチー様をここまで追い詰めるなんて」

「お褒めの言葉どうもありがとうございます。貴女みたいな勘違いに言われても嬉しくないですけど」

お互い拳を固め、引き、対峙する。

「引く気は無いのね？」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

弓から矢が発射されるように、拳が放たれた。二人の拳は綺麗に直線を描き、お互いの拳を捕らえる。廃工場には、風を切る音と硬い物がぶつかる音が響いていた。次第に二人の拳は血で染まり、腫れ上がってきつつあった。何度も言うようだが、彼女らはスーツを脱げば只の人間、生身で殴り合えば、拳のほう悲鳴をあげる。そもそも、魔法少女は長く戦う事を想定されていないのである。ましてや、銃撃特化タイプの秀子や、召喚師タイプの堀田なら尚更である。二人は確実に消耗しつつあった。

「さつさと死になさい、このクソメガネが！」

「貴女のような厚化粧に引くわけにはいきません！」

秀子の赤い拳が堀田の顔を捕らえ、彼女を吹き飛ばす。柱が砕け、粉塵があがる。コンクリートに突き刺さった堀田の体は、それから動く事は無かった。

「私は、何かを成してみせる。負けるわけにはいかないんです」

突き上げた拳は、廃工場の屋根の隙間から照らされる月の光を浴びて、鮮やかに赤く光っていた。秀子は勝ったのだ。それは、変貌を遂げた彼女の最初の勝利であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7352y/>

---

魔法係長桜井秀子

2011年11月26日18時53分発行